38

吉雄流外科 3：兎口篇

板野　俊文
香川大学

江戸中期の大通詞であった吉雄耕牛とその弟蘆風が開いた成秀館で全国から人を集めて医学教育が行われた．当時の著名な蘭学者の多くはここで学んでいる．その中で外科に関する講義と実習が行われたが，これを吉雄流外科という．しかし，その実態は不明な部分が多い．教科書としては全国で吉雄流膏薬，油藥，水藥が残されているが，これらから外科の内容を覗うことはできない．何故そうなったのか？外科手術などの詳細は門外不出とされていたからである．しかし，成秀館の聴講生のひとりで讃岐の医家であった合田強とその弟大介の残した講義録等を読むと，吉雄流外科の内容がわかる．今回は兎口篇である．

合田強は宝暦 12 年（1762）長崎で成秀館に学び，講義録 5 巻を残した．講義録の最終巻の最後の記述が「兎口　治法」である．以下に転記する．

四月十一日
兎口　治法　始長刀　ハサミニテ双方トモニ切　血多出トモ不可驚　金鍼ニテ縫　鍼ヲ其儘ヲキ糸ヲ繰カケ不✓笑ヤウニ双方ニ巻木綿ノ枕ヲヲキ　上ヲ木綿ニテ項ヨリ廻シ巻ヘシ（図がある）
△巻木綿圖ノ如シ此通ニスヘシ　枕木綿ヲヲケハ肉ヨリテシマリ　ヨキモノナリ

しかし，これだけでは十分に理解できないので，他の成秀館での講義録を検索したところ，二種の記述が見つかった．

紅毛新書雑法　　吉雄永章撰譯
兎欠ノ療治　唇ノ有余不足ヲ能考
　切目ノ下ニ薄肉継タルヲ鉸ニテ切放付薬
　ラアテキスキルニア絞汁　メリロサアロム　アゝクワシキルアハナヲヨシ
　右合磁器ニテ湯煎温メテメイチャニ浸切目ニ日々ニ付癒テ后療治スル
　先其人ヲ別人ニ抱スルカワクニ入ルカ能堅メ唇切目両方上皮ヲ肉モ少カカル程鉸ニテ切取洗テ血止銀針ヲ刺針ノ両端ヨリ糸ニテカラメヨセ　切目ヲ能押ヨセ糸ヲシメ結ブ　両方エ針ノ余リタルヲ鉸取リ針ハ其侭置　但糸斗ニテ縫コトモ有　切リヨウニテ二処モ三処モ縫見合也　血シカト止ラヌトキハ血止ヲ用　是ヨリ金瘡ノ法也　尤歯茎ト金瘡ノ間シカト木ニテモ形ヲ作リ其上ニメイチヤ薬ヲ浸ヲキ木ト歯茎トノ添悪クハ蝋カエンフラス膏ヲシクモ良　此木形不入トキハ癒テ后上唇狭ク引ヨセルモノ也　外ニハ又メイチヤニ薬ヲ付シキテ其上巻木綿也　一七日ノ内大略一七日モ過縫目癒レハ糸ユルムモノ也　緩ミテ三日程スキ糸ヲ切　其日針ヲ抜　七日ノ内勿論粥　六指切コトモナルカ又ナラヌカ見合有　別レヨキハ皆切ル　初生ノ児一年ノ内吉　鉸ニテ切リ先血ヲ止メ夫ヨリ洗フテ金瘡ノ法也　初メ切ヌ内ニ能工夫シテ心強ク深ク切ラネハ必指ノカフ残ルモノ也　処ニヨリテ猶工夫有　一定ノ法ニモ非ス
吉雄先生經驗
兎唇療セント欲セハ先口ヲ合セテ見ルヘシ　能合ハヨシ　能合サレハ療治ハナラヌ也　兎辱歯一枚見レハ一ツ縫二ツ見レハ二ツ三枚縫ナリ　跡焼酎ニテ洗ヘシ　先前□口ノ内ハクキノ上ニ皮有ヲ平針ニテ切ヘシ　翌日ニテモ鋏ニテ此両端ヲ切両ノ合木ヒツタリト付ヤウニスルナリ　別テ此鼻ノ下迠深ク切込サルトキハ愈テ後鼻ノ下能ツカヌ故見苦シキモノ也
此ウラハホツシンメリロンヲ付也　但シヘンケイ草奇也
両方針ノ出タル処ヘ皮ヲツハノ如クシテ入也　針ハ銀カ金カヲ用ヘシ　何マテモ愈□迠モ抜ヌ也　但不愈トキハ焼金當テ両方タゝ□イヘ合スコト有ナリ　總テ針ハ唇ノ裏ニ通ラヌヤウニ縫ヘシ　針ノ両方ヨキ程ニ切テ捨ルナリ　夫ニ皮ノツハタ入糸ヲチカヒ々々ニカケルナリ　後七日シテ愈合トキ自糸緩ム者也　巻木綿図ノ如ク耳ノ上ト下トヘ巻也　杖木綿アル故疵口自愈合也　上ハ幾重モ又巻也
　　又前掛ト云物ヲ拵ヘ　眼ヲ覆フコトアリ

発表では，図や参考資料に関する情報等の詳細についても明らかにする．